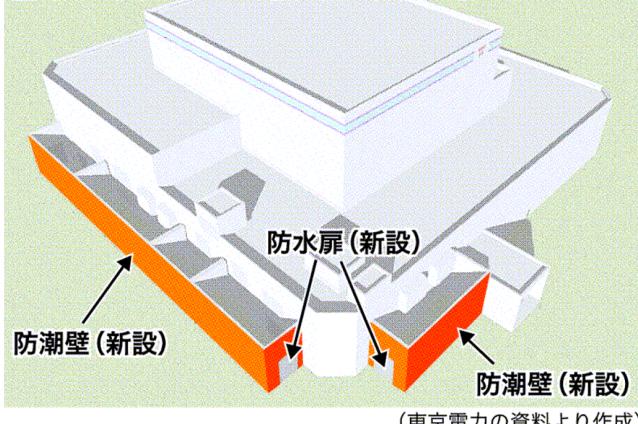


柏崎刈羽原発1～4号機建屋の津波対策



(東京電力の資料より作成)

東京電力は7日、柏崎刈羽原発の津波対策として、海拔5mの敷地にある1～4号機の原子炉建屋に防潮壁を新設すると発表した。福島第1原発が想定を超える津波で電源を喪失したことを受け、建屋外壁にある開口部からの海水侵入防止を目的とした。現在、同原発で想定する津波の高さは最大3・3mだが、防潮壁の高さなどの詳細は詰めておらず、施工時期も未定としている。

原子炉建屋には外部電源喪失時に起動する非常用ディーゼル発電機などを設置。換気用の開口部は1号機に27方所、2号機に16方所、4号機に20方所あり、地面からの高さは最も低いところで2mで、海拔は7m。

防潮壁は開口部を壁ごと覆う形で設け、海水が建屋を回り込んで侵入するのを防ぐ。海側の外壁ところ、1～4号機の他の機主排気筒で1日に検出された放射性物質はビ素76だつたと公表。原子炉水を試験用に採取する設備でビ素が気化し、換気経路を通じて排気筒に達したとみている。

柏崎原発

1号機に防潮壁

新津波対策へ開口部から浸水防ぐ

の建屋や海拔12mの敷地にある5～7号機で防潮壁を設ける計画はないとしている。東電は3月、柏崎刈羽原発で電源車や給水用の消防車を配備。津波に伴う流木やがれきを除去して電源車などの通路を確保するための重機2台も今月に導入した。

また東電は同日、1号

機主排気筒で1日に検出された放射性物質はビ素76だつたと公表。原子炉水を試験用に採取する設備でビ素が気化し、換気経路を通じて排気筒に達したとみている。